

# 五ヶ山～山の暮らし、いのり、そして埋蔵銭～ ダイジェスト版

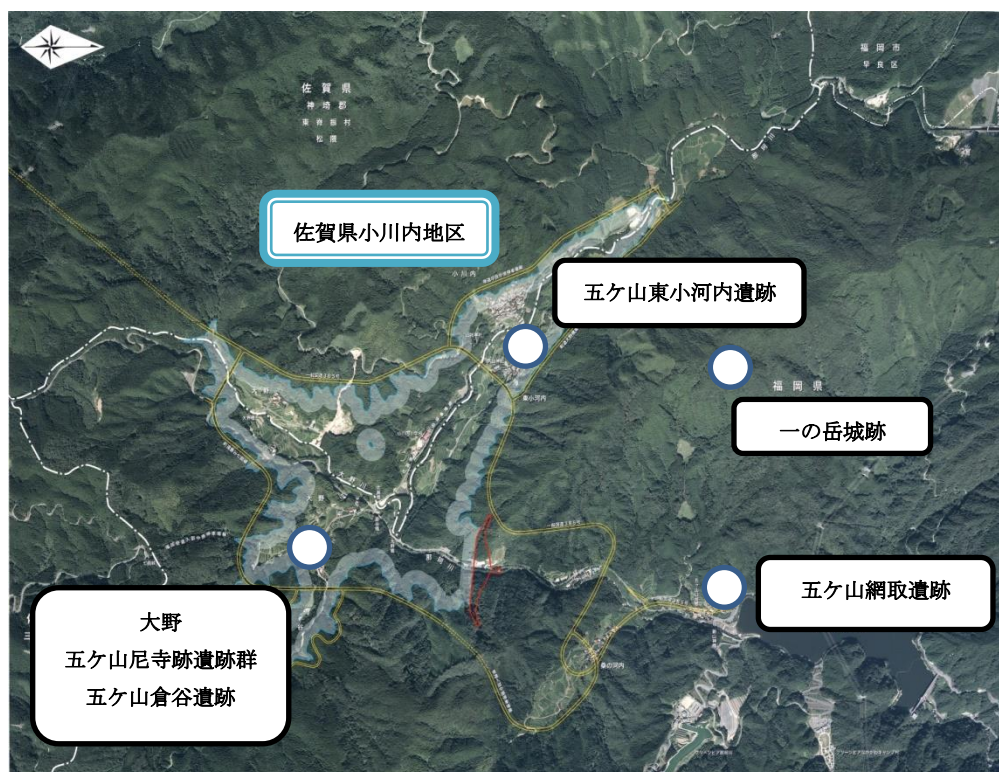
福岡県では昭和53年から54年にかけて、福岡市を中心に異常湧水が発生しました。これを受けて、多目的ダムの建設が計画され、筑紫郡那珂川町五ヶ山地区の4集落と佐賀県吉野ヶ里町のおがわち小川内集落が水没するなどの影響を受けることになりました。福岡県教育委員会・九州歴史資料館では五ヶ山地区に関わる文化財の記録保存を図るべく、平成14年度から19年度には歴史や民俗、建造物、美術工芸、天然記念物などを、平成16年度から平成28年度には埋蔵文化財の発掘調査と整理報告作業を行いました。

この企画展示は、これらの調査によって得られた成果を紹介するものです。

## 「五ヶ山」の由来

那珂川町南部に位置する脊振山は、福岡平野からひととき雄大な山容を見せています。博多湾に出入りする船にとってかっこうの目印となっていたことから、古来より霊峰として厚く信仰されていました。

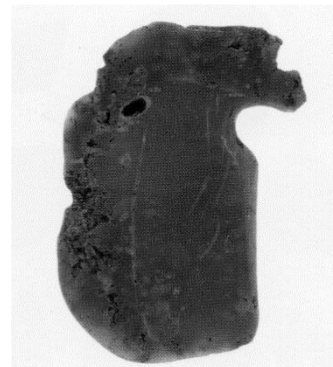
その脊振山北麓の開けた地形に点在する、東ひがし小河内、大野、桑河内、網取、道十里みちじゅうりの5地区が五ヶ山地区です。江戸時代の『筑前国続風土記拾遺』には、五ヶ山地区は炭焼き・紙漉き・製茶などの産業が多いため、田の数に比べて人口が多かったことが記されています。



五ヶ山地区とダム計画範囲

## 五ヶ山尼寺跡遺跡群4・6区

尼寺跡遺跡群は大野地区倉谷の丘陵緩斜面にあり、アカホヤ火山灰を含む黄褐色土の堆積層から縄文時代早期の遺物が多く出土しました。縄文時代の遺構は落とし穴が7基確認されたのみでしたが、<sup>けつ</sup> 玦状耳飾りが発見されたのは大きな発見でした。



<sup>けつ</sup>  
五ヶ山尼寺跡遺跡群出土玦状耳飾り

## <sup>くらたに</sup> 五ヶ山倉谷遺跡

那珂川町教育委員会が調査した、古墳時代前期から中期の集落跡で、竪穴住居跡や溝などが発見されています。出土した土器は、地元の伝統的なものと外来の近畿系土器が混ざっており、この時期の平地の集落跡と同じ様相です。その頃からすでに交通の要衝となっていたのかもしれませんが。



五ヶ山倉谷遺跡

## <sup>あみとり</sup> 五ヶ山網取遺跡7区

室町時代と江戸時代中期を主体とする集落跡です。<sup>あみ</sup> 網取地区は五ヶ山の中心的存在であり、川沿いには江戸時代には<sup>かじ</sup> 鍛冶遺構と<sup>はりゆき</sup> 梁行7.2m×<sup>けたゆき</sup> 桁行4.2mの大きさの掘立柱建物跡があり、<sup>かじ</sup> 鍛冶屋が営まれていました。

丘陵側の高台には溝で区画された室町時代の屋敷地があり、この遺跡からは高価な中国産陶磁器をもつ富裕な人物がいたようです。



<sup>あみとり</sup>  
五ヶ山網取遺跡出土人形手青磁碗

## <sup>おごうち</sup> 五ヶ山東小河内遺跡

<sup>おごうち</sup> 東小河内集落の中心地の下方に位置し、13～14世紀には柵で囲まれた区画があり、15～16世紀になると石垣で囲まれた富裕層の屋敷となりました。石垣で囲まれた区画の北西側に建物が建てられており、建物の入り口に向かう石段や、排水溝をもつ裏庭が設けられていました。東小河内集落の中心的存在な屋敷地だったと考えられます。2つの時期にはそれぞれ巨石祭祀が行われており、1号祭祀遺構からは和鏡が出土しています。



<sup>おごうち</sup> <sup>さいし</sup>  
五ヶ山東小河内遺跡 1号祭祀遺構

## 銘茶「五ヶ山茶」

臨濟宗の開祖である栄西りんざいが建久2年(1191)に、宋から茶の種子もしくは若木を日本に持ち帰ったのが、日本茶の始まりとされています。栄西が茶を植えた場所の1つが脊振山ちゅうぐう りょうせんとされ、中宮の靈仙寺じ おつごほうどう乙護法堂の前には「日本最初之茶樹栽培地」の石碑が建っています。脊振山は、寒暖の差が大きく、夏涼しく新緑あさぎりの頃に朝霧に包まれるという茶の生育に適した環境であったため、山中の各地で栽培されました。

五ヶ山地区では、『筑前国続風土記』に「五箇山は山中境内せはく、田圃すくなけれ共、人民多し。茶を多く植て家産とす。五ヶ山茶とて、是を用ゆ。」とあり、『筑前国続風土記附録』には、「五箇山の郷内に茶を多く生す。名産也。」と記されており、江戸時代には「五ヶ山茶」が名産品になっていたことがわかります。

明治末期には茶畑が見られなくなるとされます。調査時には山中に野生化したような茶樹が所々に見られ、自宅用に茶を作る家が残る程度となっていました。

## 戦国城下の村

中世後期の五ヶ山地区は、筑紫氏ちくしと大友氏・島津氏が激しく争った場所の一つとして文献に記されています。筑前と肥前をつなぐ街道のそばにある亀ノ尾城いち たけ てんしやう とすと一の岳城は、天正年間には鳥栖市かつのお勝尾城に本拠を置く筑紫氏の筑前側の拠点となりました。

筑紫惟門は弘治3年(1557)北部九州に勢力を伸ばした大友氏に謀反を企てますが、計画が発覚して本城である勝尾城を放棄して、五ヶ山に退きます。永禄9年(1566)にも叛旗を翻し、一の岳城こ(五ヶ山城)に立て籠もりましたが、大友軍の猛攻に耐え切れずに永禄10年(1567)に降伏しました。この時これかど、惟門は五ヶ山で自害しています。

天正7年(1579)、前年に大友氏が耳川の戦いで島津氏に大敗したのを機に、龍造寺隆信りゅうぞうじたかのぶが脊振山を越えて、大友氏の支配していた筑前に侵入します。筑紫広門ちくしひろかどは龍造寺氏に味方して、五ヶ山を取り戻し、太宰府の岩屋城攻めにも参加しました。

天正14年(1586)、島津氏てんしやうが筑前侵攻を始めると、広門ひろかどは島津氏に捕らえられますが、豊臣秀吉の大軍が九州に上陸すると、広門は脱出して、まず五ヶ山の一の岳城を取り返し、勢力を回復して勝尾城を奪い返しました。

このように、五ヶ山は筑紫氏にとって筑前進出の拠点であるとともに、最後の砦でもあったのです。



いち たけ  
一の岳城跡に残る石垣

## 五ヶ山埋蔵銭

昭和30年に網取地区で素焼きの壺に入れた3044枚の古銭が発見されました。もとのところに埋め戻されていましたが、ダム関係の発掘調査に合わせ発見者のお孫さんから寄贈したいと申し入れがあったことから、掘り出すことになりました。発見された当時の素焼きの壺の下に江戸時代の染付の皿を蓋として被せた昭和20年代の肥前製の火鉢があり、皿をとると大量の銅銭が入っていました。

最も新しい銭は1461年に初めて作られたものであり、戦国時代に多く流通した中国の明代の銭が多数を占めることから、15世紀後半から16世紀に埋められたもののようです。それが江戸時代前期になって掘り出され、当時の素焼きの壺に入れて埋め直されたものと考えられます。



## 筑前国 VS 肥前国

江戸時代になると大名による武力を用いた領土争いはなくなりましたが、村境や水をめぐる争いは頻繁にありました。五ヶ山は福岡県側の筑前国と佐賀県側の肥前国の境界だったので、筑前側と肥前側の村の争いは国同士の争いとなることから、五ヶ山では多くの国境石を設置し、境界争いを防いでいました。

### 国境石

福岡県と佐賀県の県境付近的那珂川町権現山から札木山までの尾根沿いから地焼谷を経て、東小河内の那珂川中洲までの間に国境石 39 基と類似の碑4基の計 43 基が確認されています。国境石は江戸時代の福岡藩と佐賀藩の間に起こった領地境をめぐる争いの結果建てられたものといわれており、筑前側が設置した国境石は 30 基あり、肥前側が設置した国境石と向き合っているものもあります。

ダムによる水没地区内にある4つの国境石は、これらと異なり五ヶ山村の村民が建てたもので、「此石垣 相障申間舗(「敷」もある)事 筑前国 五箇山村(このいしがき あいさわりもうすまじきこと ちくぜんこくごかやまむら)」と刻まれています。



五ヶ山に残る国境石